小侍従の歌と歌林苑

山本晶子

一

小侍従（一一二一頃―一二〇一頃か）が歌壇で活動を旺盛に行なっていた時期は、歌林苑の存続時期と重なる部分がある。小侍従の家集をはじめとする文献中には、歌林苑の活動に参加していたという証拠は現在のところ見出せないが、小侍従の交友圏が歌林苑会衆とかなり重なることや、歌林苑で行われた歌会・歌合における題と『小侍従集』所収歌の題が一致することなどから、歌林苑参加の可能性は早くから先学により指摘されてきた。

例えば森本元子氏は『私家集の研究』で「讃岐・小侍従らが歌林苑に出入りするようになったのは、おそらく二条院崩御の後であろう。それには清輔や頼政・教長らの指導があったにちがいない」「承安二年の撰といわれる『歌仙落書』に、女流としてはここに述べる三名（山本注、小侍従・大輔・讃岐）があげられている。この書は『歌苑抄』に関係があって、歌林苑に活躍した時期の歌風を見る上に注意される」[1]と述べている。また、糸賀きみ江氏の論考にも、小侍従が「当時の歌人の温床であった歌林苑に身を寄せ、育成された女房歌人」[2]であるとの記述がある。しかし、これらの論考では、歌林苑参加に関する証拠の存否については特に言及されていない。また、石川暁子氏の「歌林苑をめぐる歌人たち」（『和歌文学研究』五〇、一九八五年）は、特に小侍従のみについて論じたものではないが、歌林苑歌会で出題された題と同様の題で歌を詠んでいる歌人や、歌林苑会衆が関わった歌合への参加歌人、会衆との私的接触の記録が残る歌人の洗い出しを試みている。この検討を通して、会衆・非会衆の「境界周辺の歌人たち」、および「歌林苑への直接参加経験の有無はともかく、そこで行なわれていた試みに一方ならぬ関心を寄せ、多分に個人的な交遊を媒介にしてではあろうが刺激を受けた、いわば間接的な参加歌人」をリストアップし、その一人として小侍従の名をあげている。

石川論文で指摘されている事実のうち、小侍従に関連する部分を抜き出して要約すると以下のようになる。

①歌林苑十首会との同題歌……小侍従に「寄源氏恋」題あり

②歌林苑歌会（日常的な歌会と思われるもの）との題の一致

・歌林苑での「逢樵夫問花」題（俊恵・頼政）

……小侍従にも「樵夫尋花」題あり

（他、師光に「花尋樵夫」題、覚性に「問樵夫尋花」題あり）

・歌林苑での「過門不入恋」題歌（頼政）

……小侍従・大輔・隆信にも同様の題の歌あり

③歌林苑歌人が主宰、もしくは二名以上参加している歌合に、小侍従が五度参加（『永暦元年七月皇太后宮大進清輔歌合』から治承年間に至るまでの期間、四十七度のうち）

④会衆のうち、頼政・頼輔・有房・大輔・隆信・寂蓮・実定・実家と私的な交流あり（歌会・歌合のみや、親子兄弟間の接触は除く）

このように、直接の証拠は現存しないながらも、小侍従が歌林苑に参加していた可能性はかなり高いとされてきた。本稿では、こうした見方を補強するものとして、小侍従歌の歌題、発想、表現について歌林苑歌人の歌とどのような関連が認められるか、という点から、数首の歌の検討を通し、歌林苑との交流について考察を試みる。

二

小侍従歌の検討に入る前に、歌林苑の存続時期と小侍従の和歌活動について概観しておく。

歌林苑の活動時期については簗瀬一雄氏に詳しい考証があり、主宰者俊恵が京に在住中参加した歌合の年代、諸歌集詞書の歌林苑に関する記述、歌林苑で編纂された撰集『歌苑抄』の成立時期を総合して、「歌林苑は、大体保元から治承に至る約二十年間、白河の俊恵の僧房に存したと見ることが出来る」[3]とする。

この期間の前半にあたる保元年間から長寛年間頃までの十年前後の間については、小侍従がどの程度歌壇で活動していたのかは定かではない。永万元（一一六五）年成立の『続詞花和歌集』に三首の歌が採られ、うち一首は同年から翌年にかけての間に成立した『今撰集』にも収められているから、この時期までには作歌活動に励んでいたのではあろうが、これらの歌は、詞書が歌題のみ、または「題不知」であるため、いずれの歌も詠作事情等は判然としない。

この二歌集への入集と同時期（一一六六年か）に小侍従は太皇太后宮多子に出仕しており、現存する資料に拠る限り、この頃から歌合等への参加が始まっている。森本氏によれば、治承二（一一七八）年前後に三年ほどの地方在住期を挟むようであるが、[4]永万二（一一六六）年の『中宮亮重家朝臣家歌合』から安元元（一一七五）年『右大臣家歌合』に至るまでの五度の歌合に出詠、また歌合のほかにも、長寛三（一一六五）年―承安二（一一七二）年の間の成立とされる『実定百首』や、寿永元（一一八二）年の寿永百首歌集の企画等にも参加している。この時期が、おおむね歌林苑存続期間の後半にあたる。

また、上記五度の歌合はすべて、前掲石川論文において言及されている「歌林苑歌人が主宰、もしくは二名以上参加している歌合」にあたるが、単に会衆のいずれかと同席していたというだけでなく、出詠者に占める会衆の数が多かったことも注目される。各歌合の参加者のうち会衆[5]は以下のとおりである。

・『中宮亮重家朝臣家歌合』（一一六六年、出詠者全二八名）
資隆・成仲・頼政・頼輔・有房・隆信・政平・俊恵

・『経盛朝臣家歌合』（一一六七年、二四名）
清輔（判・出詠とも）・頼輔・頼政・資隆・有房・定長・成仲・教長・俊恵・登蓮

・『住吉社歌合』（一一六九年、五〇名）
敦頼（＝道因、主催・出詠とも）・俊恵・清輔・実家・政平・経正・大輔・通清・頼政・盛方・頼輔・隆信・季広・定長・憲盛・憲経・素覚

・『広田社歌合』（一一七二年、五八名）
道因（主催・出詠とも）・俊恵・実家・大輔・政平・重保・資隆・季広・頼政・盛方・登蓮・隆信・憲盛・通清・経正・広言・伊綱・祐盛・憲経

・『右大臣家歌合』（一一七五年、二〇名）
清輔（判・出詠とも）・隆信・季広・俊恵・頼政・頼輔・仲綱・道因

以上のうち『広田社歌合』および『住吉社歌合』は出詠者が社頭での披講に出席していない歌合であるから、出詠者間の交流の可能性は他の歌合と同列に扱うことはできないし、また歌林苑会衆の間でも、歌林苑への関心や活動参加の頻度には各々濃淡があったであろう。しかし、小侍従がこの五度の歌合の全てにおいて、歌林苑主宰であった俊恵やごく初期からの

会衆である頼政[6]と同席していることは、注目されてよい。[7]

小侍従と頼政とは、両人の家集に見られる如く、個人的に交際していた間柄であるが、歌壇においてもかような交流の場があったわけである。また、小侍従と俊恵との直接の交流は家集等からは窺えないものの、『無名抄』の「大輔と小侍従一双の事」に俊恵の言葉として、小侍従の歌に対する「本歌にいへる事の中に、さしもありぬべき所をよくも見つめて、是をかへすこゝろばせの、あふかたきもなきぞ」という批評が記されている。ここで言及されているのが、歌合・歌会等で人目に触れることの多い題詠歌ではなく、主として個人的に交わされる贈答歌についてであることも、俊恵には小侍従の日常詠に接する機会があったらしいことを窺わせる。このように、小侍従が歌林苑の会衆やその歌に触れる環境は整っていたとみてよかろう。

三

歌林苑歌会で出題された歌題に「逢樵夫問花」「過（遇）門不入恋」があり、この二題とほぼ同様の題を用いて小侍従が作った歌が家集に収められている。先に触れたように、この事実は既に石川氏の前掲論文に指摘されているが、ここでは更に若干の補足をしておく。

「逢樵夫問花」題、および同種の題で詠まれた、俊恵・頼政（以上、歌林苑での詠）、覚性・師光・小侍従の歌は、それぞれ以下のとおりである。

逢樵夫問花　同（注、歌林苑を指す。九七番詞書）

咲きさかずさこそとふとも山人よめぐまむ枝ををりそへてくる
（俊恵、林葉集一〇一）

逢樵夫問花の心を歌林苑人人読み侍りしに

をりえたる妻木こるをに物まうす彼峰なるは雲か桜か（頼政集六六）

問樵夫尋花

つまぎこるしづをにとへば花はよな朝日あたりの嶺にとぞいふ
（覚性、出観集七二）

花尋樵夫

つまぎをばはなの陰にややすめつるさらばいづくとわれにをしへむ
（師光集一五）

杣人に山の花をたづぬといふことを人人よみしに

とへどこのしづをはすぎぬ我が身にもおはぬ桜の花はいさとて
（小侍従集一九）

覚性歌・師光歌・小侍従歌の題には「逢」にあたる字句はないが、山の隅々まで知っているであろう山人に山中の桜の在処を、あるいは開花の具合を尋ねる、という題意は共通している。なお、師光歌・小侍従歌が入集する『月詣集』では、「樵夫尋花といふ心をよめる」との詞書が付されている。

これらの歌は、題自体が『古今集』仮名序の「おほとものくろぬしはそのさまいやし、いはばたきぎおへる山びとの花のかげにやすめるがごとし」を意識したものであろうが、師光・小侍従の二名の詠は、さらに歌の表現においても仮名序の措辞や比喩を踏まえている点が共通している。師光は第二・三句に「花のかげにやすめる」の詞をほぼそのまま取り込んでいるし、小侍従は「しづを」と「桜の花」の不釣合いな様という発想を採っている。さらに「我が身にもおはぬ」の句は、同じく仮名序の「ふんやのやすひではことばはたくみにてそのさま身におはず」から得たものである。

山中の花を探し求めるという内容の歌題や歌は早くから多数存するが、その多くが、話主が自ら花を求めて山中に分け入るという状況を詠ずるも

のである。この「逢樵夫問花」と同様の題は、管見の範囲では上記五首のほかには見出せない。また、題にかかわらず、話主が山中の花について山人に尋ねるという内容の歌は、皆無ではないが非常に少ない。頼政には、前出の歌のほかに、

歌林苑にて人人花の歌読み侍りしに

花さかばつげよといひし山守のくるおとすなる駒にくらおけ

（頼政集六三）

という作があるが、歌林苑関連詠以外では、『西行法師家集』の「花」と題する歌群の中に、「山人に花さきぬやと尋ぬればいさ白雲とこたへてぞ行く」「山人よ吉野のおくのしるべせよ花もたづねんまた思ひあり」（四〇・四九）という歌が見える程度である。

和歌の世界では風流を解さない人間と歌われる山人が、山中の花についてよく知っているはずの者として歌題に登場することは興味深い。前述の歌が詠まれた折の出題者は、『古今集』仮名序を踏まえつつ、あえて山の花の歌の本意からはずすことを試みたのであろう。

上記五名中、歌林苑会衆は俊恵と頼政の二名であるが、覚性と師光も、歌林苑と交流があった可能性が高いとされる人物である。[8] 小侍従の「とへどこの……」の歌は、詞書に「人人よみしに」とあるから何らかの歌の会における作ではあろうが、ほかにこの歌が入る『月詣集』でも詠作事情は記されていないため、小侍従が歌林苑の歌会に参加することがあったのか、それとも歌林苑に関心を寄せる人々が別の折にこの題を採り入れたのかは、判然としない。しかし、従来不釣合いなものとされていた山人と花とを取り合わせた実験的な題を、小侍従が、歌林苑の人々、および歌林苑との何らかの関係が推測される人々と共有しているという事実は、注目に値する。

「過門不入恋」題は、歌林苑での歌は頼政、歌林苑でのものとは確認できないが会衆による歌が隆信・大輔・讃岐、会衆以外の歌では小侍従のほか季能のものが存する。[9] 但し、大輔歌の題には「不入」にあたる字句はない。また、頼政歌のみ題の第一字が「過」ではなく「遇」であるが、寛文元年版本等、「過」とする伝本がある。

遇門不入恋、歌林苑会

人心かはれど明けぬま木の戸をきなれし駒ぞすぎがてにする

（頼政集三八五）

かどをすぎていらざる恋といへる心を

しのびつつかよひなれにしくろこまの過ぎわづらふも人やとがめむ

（隆信集五二九）

かどのまへをすぐるこひ

わすれにしいもがかどをばすぎきぬとたれにかたりてこよひねぬらん

（大輔集一二五）

過門不入といふ恋　二条院讃岐

うき人もすがたはさらにかはらねばすぐるよそめをそれとしりぬる

（言葉集一三六）

季能朝臣

わすれぐさおふるかどとてすぎぬらんわがこころにはしのぶとおもふに

（言葉集一三九）

※以上の二首の間に配されている一三七・一三八番歌は、小侍従と大輔の歌

かどをすぐるにいらぬ恋

すぎぬなりもとこし道をわすれねばあゆみとどまる駒をはやめて

（小侍従集一一一）

この題の歌に関しても、『小侍従集』、および小侍従歌が入る『言葉集』・

『月詣集』では詞書の記載が歌題のみであるため、先の「枇人に山の花をたづぬ」と同様、詠作事情は定かでない。

上記五首のうち、頼政歌は話主が馬に乗って訪ねたものの相手が戸を開けてくれないという歌、小侍従歌は話主が家で相手を待っていたが通り過ぎてしまったという歌で、話主の立場は一方が男、一方が女である。しかし、相手が心変わりしてしまった現在も、かつて通いつめた道をよく憶えている馬は家の前を通り過ぎかねている、という発想は両者に共通するものである。また隆信歌も、忍ぶ恋、そして第三者に見咎められることへの危惧、という要素はこの五名の中では独特のものであるが、やはり「かよひなれ」ていた馬が「過ぎわづらふ」という状況が詠まれる。

現存資料の範囲内では前例のない題にもかかわらず、この題で詠んだ五名のうち三名が、通り過ぎかねている駒という同じ発想を取り入れていることになる。このことから、小侍従と頼政・隆信は同じ折にこの発想を共有して歌を詠んだという可能性が考えられる。そうでないとしても、小侍従が上記の頼政か隆信の歌に関心を持ち、「すぎぬなり…」の歌を作ったということは十分ありうる。

さらに、この小侍従歌については、次に掲げる俊恵の歌の影響も認められる。

遣車待恋　通成朝臣家会

まつかたの車のおとはわが門を過ぎぬまでこそ嬉しかりけれ

（林葉集八五七）

俊恵歌では、車の音が近づく間の期待と、素通りする様子から車の主が待ち人とは別人だったと知った落胆、という心情の変化が詠まれる。小侍従歌も、話主は自分の門前を過ぎる相手の姿を見たわけではなく、屋外の物音から想像しているのだということが、伝聞推定の「すぎぬなり」から窺える。車と馬という相違はあるものの、屋内で耳を澄ます話主を置き、車輪または蹄の音が遠くなってゆくさまに着目して詠んだ点が共通しているのである。そして、小侍従の歌では、心変わりした恋人（の乗る馬）が通り過ぎようとする音に着目しつつも、「駒をはやめて」という音の変化まで観察しているところが、より複雑な描写となっている。

俊恵歌の詞書にある「通成朝臣家会」が如何なる歌会なのかは不明であるが、小侍従は俊恵との交流を通じてこの歌を知り、「かどをすぐるにいらぬ恋」題で歌を詠む際に、通り過ぎる音を描くという俊恵の手法を取り入れたと思われる。

四

炉辺物語

さ夜すがら君と我がするむつごとにうづみ火をさへおこしつるかな

（小侍従集九三）

炉辺女談

むつごとのわがてずさびのはひうらをよそげにいもが思ひ顔なる

（林葉集八八二）

炉辺女談

くらき夜もややおこる火を中におきてこゑのみしつるいもぞみえぬる

（頼政集四五二）

詞書には歌林苑に関連する記述はないものの、小侍従・俊恵・頼政の三者が類似の題と発想で詠んでいる例である。三首とも詞書に詠作事情が記されておらず、この題が歌会・歌合などの場で出題されたものか後付の題なのかも不明であるが、「炉辺〇〇」という題を用いているのは、同時代ではこの三名のみで、他には、やや下って、家隆・定家・良経に「炉辺懐旧」

題がみられる程度である。小侍従と、俊恵・頼政両名とでは、「物語」にしろ「女談」にしろ、炉端での語らいという題意は共通であり、また「炉辺物語」題の小侍従歌についても「君と我」の「むつごと」という字句から、他の二人と同じく恋の語らいを詠んだ歌であるということが窺える。

これらの歌題は、既に存在していた「炉火」（埋火）題の歌が発想の基となって作られたものと思われる。「炉火」「埋火」題の作例はあまり多くはないが、『好忠集』や初期百首歌中の埋火を詠んだ歌、および、『和漢朗詠集』の「炉火」題などの影響を受けて『堀河百首』に採り入れられ、歌題として定着したものとされている。[10] この『堀河百首』は、俊恵の父俊頼が出詠した百首歌であった（橋本不美男・滝沢貞夫両氏の論考[11]の如く、俊頼は出詠しただけでなく本百首の企画者でもある、とする説も存する）。それゆえ小侍従たちも、単に当時の題詠の規範であるという理由からのみならず、歌林苑の主宰俊恵に非常に縁の深いものとして、この百首を重要視し、参照していたであろう。

ただ、『堀河百首』での「炉火」題の歌は、

埋火のしたにこがるるかひなしやきえも消えずも人のしらねば
（一〇八九・公実）

いかにせんはひの下なる埋火のうづもれてのみ消えぬべき身を
（一〇九六・俊頼）

の如く、人知れず恋する話主の心を、灰の中で熱く燃える埋火に譬える、或いは、世に知られぬ不遇のわが身を、人に気付かれぬまま燃える埋火と重ね合わせて詠むものが大半である。話主が実際の埋火の傍らにいるという設定での歌、つまり、小侍従ら三名の「炉辺物語」「炉辺女談」題に通じる状況を詠む歌も、

いふ事もなき埋火をおこすかな冬のね覚の友しなければ
（一〇九一・国信）

埋火のあたりに冬はまとゐしてむつがたりする事ぞ嬉しき
（一一〇一・隆源）

といったものが存するが、国信歌のように冬の夜の孤独を癒すものとして埋火を詠むか、隆源歌の「まとゐ」の語に示される如く、気のおけない仲間うちでの語らいの場として炉辺を詠むかのいずれかである。

『堀河百首』以後にも、「埋火」「炉火」題の歌は若干詠まれているものの、上に挙げた『堀河百首』での類型から外れる歌はほとんど見られない。つまり、小侍従たちが詠んだような、埋火の傍らの話主と恋人が二人きりで語り合う、という歌は非常に稀なのである。もっとも、成就した恋を詠む歌が題詠歌には元々少ないため、一緒に火を囲むような穏やかで幸福な状況が詠まれにくいということも影響しているとは思われるが。

俊恵・頼政・小侍従の三名は、『堀河百首』で歌題として認知された「炉火」を意識しつつも、恋の要素を新しく取り入れて「炉辺物語」「炉辺女談」題の歌を詠んだのであろう。更には、この二題が、『堀河百首』の前掲隆源歌に見られる、埋火と「むつ語り」の語の取り合わせに触発されて作られた歌題であるという可能性も考えられる。

五

小侍従歌の検討の最後に、歌合の作で俊恵から影響を受けたと思われる例をあげておく。

（四番）右　小侍従

紅葉ちるを川の浪のたつ度にきれぎれになるからにしきかな

右歌、もみぢちるを川の浪、といへるたよりなき心ちに猶山などの事あらまほしき、きれぎれになる、といへるもおびたたしきやうなれば左勝とや申すべからん（右大臣家歌合　安元元〔一一七五〕年）

紅葉の錦が「きれぎれになる」という字句が、判者清輔から「おびたたし」つまり大袈裟にすぎると評され、それが一因で負とされた歌である。

この小侍従歌以外で「きれぎれ」の語が用いられている例は、管見の範囲では俊恵による次の一首のみである。

萩　歌林苑

さをしかのむねわけにする小萩原ただきれぎれの錦なりけり

（林葉集三七二）

「きれぎれ」になるのが、秋の風物の織りなす錦である、という点が小侍従歌と俊恵歌の間で一致しているほか、この俊恵歌が歌林苑会での詠であることも注目される。

小侍従歌の、水面に散りかかる紅葉を錦に見立てたところまでは、ごくありふれた表現であることはいうまでもない。また、俊恵歌のように咲き乱れる萩を錦のようだと詠ずる歌も、「秋の野の萩の錦は女郎花立ちまじりつつおれるなりけり」（貫之集四六四）など、紅葉と錦の歌ほどではないにしても、古くから多数存する。そして、波に断ち切られる紅葉の錦という見立ても、『古今集』に「竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ」（秋二八三・よみ人しらず）があるなど、決して珍しくはない技法である。

ただ、「きれぎれ」の語を用いるか否かにかかわらず、錦が細切れになった状態を詠むことは、新しい歌い方であったと思われる。錦は完璧に織り上げてこそ華やかさや美しさも際立つものであるから、「きれぎれ」になった様を歌うのは、従来の紅葉題・萩題の本意に適っているとは言い難い。当時としては新しいというよりもむしろ、異端に近かったかもしれない。それゆえ、歌合でも負の評価を受けたのであろう。

この『右大臣家歌合』では、歌の表現が「おびたたし」とされた例が、小侍従歌と同じ「落葉」題の中にもう一件存する。

散りかかる柞がしたにふす鹿のうへは夏毛の心ちこそすれ

（六番右、仲綱）

が、「心はたくみなるやうなれど夏毛もひとへに紅にやは侍るべからん、おびたたしく聞ゆれば何とも申しがたし」と評されているのである。この歌の判定は持であったが、「心はたくみ」との評価が、下の句の「おびたたし」さによって相殺されてしまっているところから、先程の小侍従の歌同様、少なくとも歌合では、こうした大袈裟な表現はかなり不評であったことが窺える。

『右大臣家歌合』には俊恵も出詠していたから、前掲判詞にみられる小侍従歌への評価、および、歌合での「おびたたし」き歌が不利であったことについては、当然知る機会があったはずである。それゆえ、評価されなかった「きれぎれ」の詞を、俊恵が小侍従より後に、敢えて自詠に用いるとは考え難い。そして、俊恵の歌林苑での立場や年齢が小侍従より上であったことからしても、小侍従が俊恵歌の「きれぎれ」の錦という発想に倣って歌合出詠歌を作った、とするのが妥当であろう。

六

本稿では、小侍従の歌の、主に歌題や内容について、歌林苑との交流の可能性が窺われる、あるいは、歌林苑会衆の歌からの影響がみられる点を指摘してみた。

「逢樵夫問花」「過門不入恋」題歌の検討では、単に同様の結題というばかりでなく、他にあまり類を見ない題を小侍従が歌林苑歌会出詠者と共有していること、また、特に「過門不入恋」題では、その上に、別の折に詠まれた主宰俊恵の歌の表現から学んだらしい点があることが判る。詠作事

情が明らかでない以上、これらの題が一致することを以て歌林苑歌会参加の事実を認定はできないものの、少なくとも小侍従は歌林苑での珍しい出題に関心を持ち、自詠にも取り入れてみたということは言えるであろう。炉辺での恋の語らいを詠む歌では、小侍従・俊恵・頼政が、歌林苑会衆にとっては思い入れがあったに違いない『堀河百首』を意識した題を共有していた。そして「きれぎれ」の錦を詠む歌は、小侍従が歌林苑における俊恵の歌から表現を取り入れたと思われる例である。

本稿において検討した例からは、歌林苑の中でも特に、主宰の俊恵、そして初期からの会衆頼政という二人の歌との関係が深いことが判る。そして、ただ単にこの二人のそれぞれと関係があるというだけでなく、「逢樵夫問花」題、および「炉辺……」題の歌では小侍従を加えた三人が、あるいは三人を含む人々が、歌題を共有していることも注目されよう。小侍従と頼政は私的にも親交が深かったわけであるから、小侍従が頼政に和歌の指導を受ける、あるいは共に歌を詠む折は日常的にも多々あったと思われるが、この二人に俊恵も加わっているということにより、小侍従も歌林苑との交流の場を持っていた、という可能性は高まるわけである。

歌林苑の歌会・歌合等の活動に参加する機会が小侍従にあったか否かは、現在のところいずれとも断定はできない。しかし、小侍従が歌林苑の活動や、そこで詠まれる歌に深い関心を寄せていたこと、そして、日常的・私的な集まりも多かったはずの歌林苑の歌を容易に参照できる立場にいたことは、確かなようである。本稿前段であげたとおり、小侍従と歌林苑との関係は諸先学の指摘するところではあるが、今回検討した小侍従歌の内容も、これを側面から補強する材料にはなりそうである。

［注］

＊本稿に引用した和歌本文は、すべて『新編国歌大観』による。

1　『私家集の研究』（明治書院　一九六六）第六章「小侍従・大輔・讃岐とその家集」二三二―二三三頁

2　『中世の抒情』（笠間書院　一九七九）所収、「残映のなかの才女たち――小侍従など」三四八頁

3　『俊恵研究』（簗瀬一雄著作集一　加藤中道館　一九七七）第二章第三節　三六―三七頁

4　注1掲出書、二三四頁

5　歌林苑会衆は、前掲石川氏「歌林苑をめぐる歌人たち」四七頁の整理・一覧に拠る。

6　『頼政集』に「鳥羽院かくれさせ給ひて後歌林苑にて人人懐旧といふ心を読み侍りしに読める」という詞書の歌（六二〇番）があり、鳥羽院の崩御（保元元（一一五六）年）の頃既に歌林苑が存在したことを示す根拠とされている（注3掲出書、第二章第三節三三頁）。

7　なお、この五度の歌合の他、歌林苑が存在したと思われる時期に小侍従が参加した歌合に『太皇太后宮亮経盛歌合』（仁安元（一一六六）年五月）、『右近中将資盛歌合』（寿永元（一一八二）年以前）がある。ともに証本は現存しないが、『平安朝歌合大成』での萩谷朴氏による集成では、前者の出詠者の中に俊恵・頼政の名があがっている。ただ、この集成は同一度の歌合のものとは限らないため、実際の同席状況は未詳である。

8　前掲石川論文に、師光・覚性はともに、歌林苑歌会と一致する題の歌を「逢樵夫問花」題以外にも複数詠んでいること、および、数名の会衆との私的接触があったこと、そして師光については更に、歌林苑歌人の関わった歌合への出詠頻度が高いことが指摘されている。また、覚性に関しては千草聡氏の論考中にも、歌林苑歌会の歌・会衆の歌との歌題の一致から、交渉を持つようになった経緯は明らかではないものの、歌林苑歌人と共に歌作する機会があったとの言及がある。（『日本伝統文化研究報告』平成三・四年度版所収「覚性法親王の和歌活動」四〇―四一頁）

9　なお、讃岐歌・季能歌の、歌林苑歌会との題の一致については石川論文では指摘されていないが、これは、同論文の発表時期が、この二首が載る現存唯一の歌集『言葉集』の存在が公になる前であったためと思われる。

10　内藤愛子氏「堀河百首題『埋火』をめぐって」（『文教大学女子短期大学部研究紀要』四四　二〇〇〇）三―五頁

11　『校本堀河院御時百首和歌とその研究　本文研究編』笠間書院　一九七六　三四六―三五〇頁

（やまもと　あきこ　国立国会図書館　職員）